

増山太助著

『戦後期 左翼人士群像』

評者：吉田 健二

本書は、労働運動研究所の雑誌『労働運動研究』に、1995年1月～99年3月まで50回にわたって連載された「戦後運動史外伝・人物群像」と題する左翼人士100名の評伝をまとめたものである。著者は上梓にあたってタイトルを表題に改め、また加筆補正を行なっているので、本書は事実上、改訂版としての内容をもつ。著者にとっては『検証 占領期の労働運動』（1993年）につづく四冊目の著書である。

著者は、1939（昭和14）年に京都帝大を卒業して『読売』の経済記者となった。1945年の読売第1次争議では書記長を務め、46年の第2次争議に敗れて以降、日本共産党の文化部員となり、日本民主主義文化連盟（文連）の常任理事を兼ねた。のち共産党の関東地方委員、書記局事務、東京都委員長、中央委員候補などを歴任したが、1979年に同党より除名されている。この間、1977年に雑誌『新地平』を創刊し、代表取締役・主幹を務めた。

左翼とは通常、政治的立場における急進派をさす。では戦後期の日本左翼の特徴はどこにあるのか。著者の見解は、マルクス主義者や社会主義者＝コミンテルン系左翼を中心に、アナキスト、サンジカリスト、社会民主主義者、リ

ベラリストをも含み、思想信条を異にしながら「戦争反対」「恒久平和」の基本要件で一致し、かつ「民主的な日本の建設」「民族の独立」という課題や枠組みにおいてこれを支持する勢力であるという（あとがき）。

本書は、このような立場に立って、著者が同志としてともに闘い、あるいは交遊を重ねてきた左翼人士100名をランダムに選び、その思想信条や経歴、生き様など人間像を描き出す形でまとめられている。

本書は全体を4部に分け、活動や共通性を有する2人をペアにした形で50組を立て、1組を5～6頁の配分で人物群像を描いている。第1部では徳田球一、志賀義雄、宮本顕治ら日本共産党の指導的幹部や、占領期の労働運動をリードした聴濤克巳、長谷川浩、細谷松太ら15組30名が紹介されている。

第2部では党员作家・詩人、評論家、音楽家、演劇家など学者・文化人をとりあげ、中野重治、野間宏、青山敏夫、北川鉄夫、松本慎一、関鑑子、原太郎、河原崎長十郎、高倉テル、松尾太郎ら15組30名が紹介されている。

第3部では、日本共産党の50年分裂と朝鮮戦争期における軍事闘争の問題に焦点を当て、この時期に指導的な地位にあった志田重男、椎野悦朗、春日庄次郎や、軍事闘争の第一線に立った大村英之助、永山正昭、小松豊吉ら10組20名の人物論を展開している。

第4部では、左翼メディア界で活躍した人物や、女性活動家・作家・女優を対象としている。前者では日本労農通信社の浅川謙次や暴露雑誌『真相』を発行した人民社の佐和慶太郎、後者では志賀多恵子、福永操、佐多稲子、原泉など、これも10組20名が紹介されている。

日本共産党は1922（大正11）年の創立以来、歴史を重ねて本年7月で80周年を迎えた。この

間、共産党に関しては、マルクス主義研究の一環として、また社会運動史における主要なテーマとして、上田耕一郎著『戦後革命論争史』（1956年）など多くの文献が出版されてきた。しかし、これまで党員の人物群像、あるいは「革命列伝」というような形でまとめられることは少なかった。

本書には、“民主読売”時代の編集局長だった鈴木東民や、平塚らいてう、アナキスト詩人の岡本潤など非党員も含まれているが、ほとんどは日本共産党の幹部や専従党員＝職業革命家であり、また文化・学術部門で活躍した党員である。この意味で本書は、日本で最初の本格的な「革命列伝」と言ってよく、「日本共産党外伝」の性格を合わせもつものとなっている。

本書に収録の党員や活動家の群像は、日本現代史の幕開けに彼らがどのような志を抱き、あるいは社会正義をもとめて参加したのか、むしろ人間ドラマとなっていて、もと新聞記者だった著者のジャーナリスチックな筆致とあいまってじつに面白い。

さて、本書において何よりも評価されるのは、これまで歴史に埋もれ、あるいは忘れ去られていた多数の指導者や活動家を掘り起こして光を当てた点にあるだろう。

例えば日本共産党の再建時、中央委員だった朝鮮人活動家の金天海については「在日コリアの輝ける星」（67頁）として、同じ朝鮮人活動家の保坂浩明（金秉吉）や車永秀らとともに紹介されている。戦前の1935年3月党組織が壊滅したのち岡部隆司らと再建運動を担った長谷川浩や、全協の結成を指導して自らも二代目の委員長を務めた高安重正についても、著者との関係において紹介されている。彼らは、塩田庄兵衛ほか編『日本社会運動人名辞典』（1979年）に収録されていない。なお、金天海については、宮崎学の本『不逞者』（1998年）がその人物像

の一端を紹介している。

特筆すべきは第3部で紹介されている幹部と活動家の群像であろう。

日本共産党は1950年1月のコミンフォルム批判を機に、徳田球一らの政治局「所感派」と宮本顕治らの「国際派」とに分裂する。中央委員会で多数を占めたのは前者＝「徳田派」であった。中央委員会は50年6月に臨時中央指導部（部長椎野悦朗）を設置し、軍事闘争路線に傾斜する。この50年分裂と朝鮮戦争下における軍事闘争の実態については現在でもあまり解明されていない。

本書は、51年2月の4全協で軍事方針を決めてこれを「51年綱領」として採択する経過と、この間における志田重男・椎野悦朗ら「徳田派」幹部の動静や「国際派」との対立について、当事者の人物群像をまじえて紹介していて、まことに興味深い。

とくに軍事闘争の各部門で第一線に立った活動家をとりあげていることは注目される。著者は、「トラック部隊」を統率した大村英之助、「人民艦隊」を指揮した永山正昭、「日本人民軍」を編成した小松豊吉、妙義山で「山岳拠点」を設営した相賀珊吉、早大の「独立遊撃隊」を指揮した由井誓らについて鎮魂を込めて紹介している。本書のカバー帯に「志半ばで倒れた“同志たち”へのレクイエム」とあるが、彼らは党分裂と自らがなす指導の混乱のなかで苦悩を重ね、失意のうちに人生を過ごし、小松の場合は自らの命を絶った経過があった。

文学・映画演劇・音楽・学術研究などで活躍した知識人を多数とりあげていることも本書の特徴としてあげられるだろう。敗戦当初、言論・思想界をリードしたのはオールド・リベラリストであった。だが知識人はより根本からの変革を求めてマルクス主義に傾き、日本共産党に入党した。戦後革命期、日本の民主主義文化

を担ったのは知識人党员であり、新しい“左翼文化”が築かれた。本書では、例えば文学にあっては中野重治や、のちノーベル文学賞候補にもあげられた安部公房、映画評論家の北川鉄夫や瓜生忠夫、演劇家の土方与志・梅子夫妻、それに著者が「学者・評論家の良心」(145頁)としてあげる細川嘉六と松本慎一、戦後の日本マルクス主義研究の先陣を切った山本正美や堀江正規などの人間像を語っている。

本書評に先立って、石堂清倫氏が「増山太助著『戦後期左翼人士群像』を読む」と題する書評を『図書新聞』に寄せている(第2507号、2000年10月28日)。石堂氏も、「本書の特色は各界の知識人の歩んだあとが活かされているところにある。少なくとも戦後日本の広い意味での文化運動は大体ここに現れた人々が方向づけた」として、著者が本書に収めた知識人や文化人の活動を高く評価したのであった。

本書には注意すべきいくつかの傾向や制約がある。これは運動当事者の回想録としてやむを得ない面もあるが、本書を読む上ではやはり留意しておくべき点だろう。

著者は、党内における派閥では「徳田派」に属し、「国際派」とは対立関係にあった。他方で著者は徳田書記長と西沢隆二をバックに存在し(武井昭夫「わたしの戦後ノ運動から未来をみる」『技術と人間』2002年4月号、35頁)、同じ派内の志田重男とは微妙な関係にあった。

このため本書は、全体のトーンとして「国際派」に批判的であり、同時に「徳田派」内における志田重男の指導を問題とする傾向を帯びている。例えば著者は軍事闘争に関しては、1951年8月の第20回中央委員会総会で決められ、かつ『国際派』の宮本顕治らも『51年綱領』とこの『軍事方針』をともに承認して党に復帰(220頁)した経緯からも責任の一端を有すると

し、他方で軍事方針それ自体、志田が主導したものである(218, 221頁)、としてこれを非難するのである。

日本労働史を専攻する評者は、著者がこの朝鮮戦争下における日本共産党の軍事闘争路線をどう総括するのか、はなはだ興味があった。著者自身が、この時期は「徳田派」の中核にあって東京都委員長を務め、しかも“Y部門”すなわち東京地方における非公然の軍事部門の責任者だったからである(115, 219頁)。著者は、志田に対して「幻想のうえに立った『武力闘争』の準備などまったく誤りであるばかりか、挑発的な役割すら果たした」(219頁)と批判するが、では著者が現時点で自らの指導や責任をどう総括しているのだろうか。この点の問題については本文ではほとんど言及されていない。

本書に登場する人物のそれぞれは、著者の視点からの群像や人物論の展開であって、なかには評者が抱く人物像とは違う例もある。

著者は、第1部に収録の「袴田里見と長谷川浩」の項で、長谷川の証言を引きながら、徳田球一が「ストライキ至上主義者」では決してなく、袴田が宮本顕治のため「偽証」してそうしたイメージを党内につくった、というニュアンスの文章を書いている(65頁)。だが、評者が勤める法政大学大原社会問題研究所が1980年に行なった計3回に及ぶその長谷川氏からの聞き取りでは、氏は、徳田書記長を中心とする主流派が「ストライキ重視」の路線を採っていたと述べていたし、実際、総同盟と経済同友会が中心となって展開した経済復興会議の運動に対して、日本共産党は「ストライキで経済復興！」とのスローガンを立てていた。

この点は、寺尾五郎氏も同様に証言する。寺尾氏によれば、日本共産党の中央機関誌『前衛』の創刊について徳田は当初、「理論?理論がいたいなんだ。理論誌なんていうより、まずは

大衆運動を起せ。じゃんじょんと行動しろ」(『前衛』創刊のころ(1))本誌第441号、1995年8月)と労働争議や大衆運動を直接に煽る傾向にあったという。寺尾氏は当時、宮本顕治の秘書であり、宮本が主幹を務める『前衛』の編集の実務責任者であった。

本書に収録の100名の左翼人士が、戦後日本の左翼陣営のすべてを代表するものではないという点も留意しておく必要がある。前述したように、本書は日本共産党の幹部や専従党员を中心に構成されていて、無党派左翼や市民派左翼は含まれていない。評者は、リベラリストの体制内改革派=リベラル左派も“左翼”の範疇に入れるべきであると考えている。さらに本書は、その人選が東京・関東地方に偏っていて、例えば能勢克男、住谷悦治、末川博、和田洋一ら、京都における左翼知識人・文化人は対象となっていない。

著者のスタンスは、どちらかと言えば自ら中樞に存在した「徳田派」サイドからの人選であり、あるいは人物群像であって、評者は、このことで日本の左翼運動が代表され、イメージ化されることを懸念する。戦後日本の左翼は、日本共産党が“主体”になっていたことは事実であり、評者もこれを認める。けれども日本左翼の楯円はきわめて大きく、かつ広いと評者は考えている。

著者の記憶はきわめて鮮明で、かつその記述も詳細である。評者は、1980年4月以来、法政

大学大原社会問題研究所で社会運動家やユニオンリーダーからの証言を得て、これを音声資料として保存・記録し、これを公表する仕事にタッチしてきたが、本書から学び、情報を得たものは計り知れない。じつは評者は、著者からも1989年10月以来3回にわたって聞き取りを行い、このうち『読売』の編集幹部だった吹田秀三、渋川環樹、具島兼三郎らが第2次争議後、松本重治や本書にも登場する長島又男らの政論新聞『民報』(のち『東京民報』と改題)を経て『アカハタ』に移籍し、日本共産党の機関紙が充実していく経過について証言を得て、これを「読売争議のその後」と題して本誌の第485、486号(1999年4、5月)で発表し、好評を得たことがあった。

著者は1930年代以来、左翼運動関係者のみならず、言論・メディア界、学術文化界に広い人的ネットワークを築いておられる。著者は現在89歳、社会運動家では最長老の一人であり、その証言はきわめて貴重である。戦前以来の日本左翼の歴史と問題点について、著者が胸奥に飲み込むのではなく、社会運動史研究の発展のため洗いざらい事実を公表してもらいたい、と評者は心から願っている。著者にはできるだけ早いうちに本書の続編が上梓されることを期待したい。

(増山太助著『戦後期 左翼人士群像』柘植書房新社、2000年8月刊、285頁、定価2300円)。
(よしだ・けんじ 法政大学大原社会問題研究所研究員)